

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02647

研究課題名(和文)大正・昭和期の国語教育実践における「想像」のあり方に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study on the status of "imagination" in the practice of Japanese language education during the Taisho and Showa eras

研究代表者

山本 康治 (YAMAMOTO, KOJI)

東海大学・スチューデントアチーブメントセンター・教授

研究者番号：10341934

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：大正期、国語科の文学教材の学習では、大正新教育の影響を受けた、児童主体の「想像」を重視する立場と、作者の意図を重視し、過度な「想像・空想」を抑制・排除する立場とが相克していた。しかしながら、大正末から昭和初期にかけての国語教育理論の前景化に伴い、児童の「想像」を重視する立場は弱まり、児童の「読み」もその多様性を失うこととなった。その傾向は、昭和6年の日華事変を契機として一層強まり、文学教材読解の場面では、子どもの自由な「想像」は排除され、ナショナリズムに圍繞された形での「想像」を重視するという捻じれた「読み」が強いられるようになっていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大正新教育の影響を受け、国語科の文学教材読解では、子どもの自由な「想像」に基づく多様な「読み」が尊重されるようになった。しかしながら、この多様な「読み」は登場人物への「同化・共感」を前提としており、決して「批判的な読み」ではなかった。そのため昭和期に入ると、この多様な「読み」は、次第にナショナリズムの枠に取り込まれ、「圍繞された主体的な読み」に変容していった。そしてその先には戦時下の硬直化した「読み」が展開するのである。このような「読み」のあり方を巡る史的経緯の解明は、現代の国語教育における「読み」のあり方とは無縁ではない。テキストを批判的に捉えられる「読み」が必要な所以である。

研究成果の概要(英文)：In the study of literary teaching materials in the Japanese language departments during the Taisho era, the position of emphasizing child-centered "imagination", which was influenced by the "Taisho new education", and the position of emphasizing the author's intention and inhibition/elimination of excessive "imagination/fantasy" were in conflict. However, along with the foreground of Japanese language education theory from the end of the Taisho era to the beginning of the Showa era, the position of emphasizing the "imagination" of children weakened, and the "reading" of children also lost diversity. This tendency became even stronger with the Second Sino-Japanese War of 1931, and in the scene of reading literary teaching materials, the free "imagination" of children was excluded, and a distorted "reading" was forced to emphasize "imagination" in a form surrounded by nationalism.

研究分野：国語教育

キーワード：国語教育 文学教材 想像 修身 ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

大正期の国語教育が「文学教育」中心であったことはよく知られている。大正デモクラシーの影響のもと、文学尊重の気風が形成され、その中で「文学教育」が推し進められていったのであるが、学校教育にあっては、大正7年から使用された第三期国定教科書「国語読本」の存在が大きい。編纂方針に「必ズシモ教訓ヲ主旨トスベカラズ。国語読本ノ目的トスル所ハ自ラ他ニアリ」(編纂趣意書)と記されたように、国語科は修身的「教訓」から離れ、「文学教育」による「情操の涵養」が目指されたのである(拙稿、「大正期国語科における文学教材の取扱いについて 修身科「教訓・訓戒」からの離反とその限界」(『東海大学短期大学紀要』50号、平成29年3月)。元来、国語教育に文学教材が用いられる契機となったのは、ヘルバルト派教育学の影響によるものである。「美感の形成による品性の陶冶」を目指す同教育学の方向性は、「忠君愛国」を目指す教育政策とも相俟って、国語科に修身科との密接な関係性を強いるようになっていた(拙稿、「国語科成立の背景」、『東海大学短期大学紀要』45号、平成24年3月)。しかしながら大正期に入り、教育実践の場において同教育学は主として「三段教授法」として定型化するとともに、大正7年の「国語読本」の使用を契機として、国語科は修身的「教訓」から離れ、文学教材による「情操の涵養」をその目的として自立するようになったのである。そのため、この時期、教育実践の場では、「読み」のあり方を巡り様々な立場が交錯することになる。その傾向は、子どもの多様な「想像・空想」を認め、その伸長を目指す立場と、教師の強力な指導のもと、「正しい読み」(一元的読み)への教化を目指す立場とに大別できるが、前者については、大正デモクラシーを背景とした「自由教育」、「児童中心主義」といった「新教育運動」との関係も示唆される一方、後者については、昭和のナショナリズム高揚期に子どもたちが強いられる、「忠君愛国」への再度の教化過程の前段階としての位置付けが可能であることから、教育実践の場におけるこの二者の関係について、その推移を継続的かつ全体的に実証することが求められる。

## 2. 研究の目的

これまでの研究(「大正期国語教育実践における文学教材の役割に関する実証的研究」平成27年度 基盤研究(C)採択期間27~29年度)から、大正7年以降に、教育実践の場の「読み」において、子どもの自由な「想像・空想」を重視する発言が多く見られることが分かっている(拙稿「大正期文学教育実践の場における「想像」の位相」、『東海大学短期大学紀要』51号、平成30年3月)。例えば、「桃が流れてきました」と話してやると児童は、「お婆さんが其の桃を拾ふのだ。」と予想する。(略)数回繰返して聞いてみる間には、幼児の胸中に一種の創造的想像力が発動する(玉井幸助「桃太郎の童話につきて」大正8年)また、「大きい自然の中に、のんびりとはたらいしている人たちの実相を話せば、やがて子供の想像も遅しくなることゝおもふ。その想像が敏く鋭くなれば(略)美しい感じが抱けるやうになるだらう」(詩篇「草刈」の「指導の仕方」/『読方教育要説』大正15年)などといった、「読み」を通じた子どもの自由な「想像・空想」を重視する「読み」を見ることが出来る。その一方、「子どもが稍もすると 想像的になるのは童話偏重の悪果」(木下亀城「童話偏重の悲み」、『学習研究』大正12年)「文の鑑賞における想像は、(略)文に表れている範囲内における事象に依拠してなし得る想像であり洞察であらねばならぬ」(宮川菊芳「読方教育の文芸的傾向」、『教育研究』大正15年)とする、作者を重視し、一元的な「読み」に向けて児童の自由な「想像・空想」を抑制する立場も見られる。このような「多様一元」の「読み」を巡る議論は、「国語教育理論」についても見ることが出来る。芦田恵之助は、「ある文章に対して読者が百人居れば解釈は百色である」(『読み方教授』大正5年)と児童な自由な「想像」を認め、多様な解釈を可能にする立場を明確にする。一方、垣内松三は「作者の言はんとするところをハツキリつきつめるやうに読む」(『読方教授の理論と実際』大正15年)と「作者」を重視した一元的な読みを主張する。垣内が大正11年に発表した「形象理論」は国語教育の理論的支柱として高く評価されているが、「作品を絶対視し、限りなく作者に近づいていけばよしとする読みの理論の問題である」(田近洵一、「私にとっての『国語の力』」、『昭和57年)との指摘があり、また一方、芦田に対しても、例えば、高橋喜藤治は、その立場を肯定しつつも「これを極めて具体的事実の即して有力なる指導原理を見出そうとすれば、果してこれが万全のものであるかどうか」(「文を読むことについて」、『教育研究』大正15年)と実効性に疑義を呈しており、いずれの説も、「読方教育学説の進歩に比し、その教育事実の進歩は必ずしも伴っていない」(丸山林平、『読方教育体系』大正15年)との指摘される通り、改めて教育実践との関係について検証することが求められる。ここで示した問題系は、その後の史的経緯を見れば、昭和8年頃には、多様な「読み」が排除され、作者優位の一元的「読み」を前提にした、教師の示す一元的価値(忠君愛国)への「読み」を強いる状況へと展開したことを忘れてはならない。例えば、「桃太郎」は昭和8年には「冒険性によつて興味づけられ、(略)民族的精神の涵養になくはないもの」(高橋喜藤治、「新読本巻二を読んで」、『教育研究』昭和8年)と位置付けられ、更には、太平洋戦争下においては「鬼畜米英打倒」の象徴として扱われるようになる。このような「読み」の状況の起点が、大正末の国語教育における、一元的な「読み」と、自由な「想像・空想」による多様な「読み」との対立にあり、その後の多様な「読み」の衰退がこのような状況を引き起こしたとすれば、そこでの議論の実態把握と構造分析、さらには時

系列での変容を把握することは不可欠だと考えられる。また、その際、ヘルバルト派教育学を源流とする三段階教授法が定型としてこれらの流れに関わっていたことも既に示唆されており、改めてヘルバルト派教育学との関わりについても視野に収め、実証的に調査を進めたい。このような動向は小学校教育だけでなく、就学前教育でも「想像・空想」を巡ってどのような実践がなされたのかの調査が必要である。既にこれまでの研究において、幼児教育においても、明治末から大正期の修身的「教訓」からの離脱による、絵本、童話の自由な「読み」への模索の様相は明らかになりつつある。(桑原(北川)公美子、「明治期の幼稚園教育における童話の役割～「修身的教訓性」と「美感の形成」の対立と共存～」、「乳幼児教育学研究」第25号、平成28年12月)。ここでは特に、幼稚園教育と小学校教育との連続性において捉えることの必要性が示唆されており、本課題研究においてもナショナルリズム高揚期に言語教育全体がどのように向き合っていたかについて、明らかにすることが求められる。

### 3. 研究の方法

[研究系列A：大正末から昭和初期(～8年)における文学教育実践に関する研究]

国語教育実践に係る先行研究の到達点の整理。教育実践の場での「想像・空想」に係る「読み」の実相について、東京高等師範学校と同附属小学校、及び各地(北海道、東京、奈良、鹿児島)の師範学校(附属小学校含む)の実践記録、教案等を対象とした調査研究。史的観点から変容の過程とその理由を明らかにする。

[研究系列B：大正末から昭和初期(～8年)における国語教育理論に関する研究]

国語教育理論に係る先行研究の到達点の整理。特に垣内については、「読者」重視の視点の存在の指摘(安直哉、平成27年)もあり、その点も含め検討を進める。当該時期の国語教育理論の展開について、当時の小学校教育実践の中核であった東京高等師範学校附属小学校研究誌「教育研究」、及び各地(北海道、東京、奈良)の師範学校(附属小学校含む)研究誌を対象とした調査研究。なお、実践事例と国語教育理論との関係についても教育講習会記録等を通して調査研究を行う。史的観点から変容の過程とその理由を明らかにする。

[研究系列C：大正末から昭和初期(～8年)における言語教育実践における文学教材等の取扱に関する研究] 就学前言語教育に係る先行研究の到達点の整理。就学前言語教育実践(素話や絵本等)及び小学生の課外読物実践に係る「想像・空想」に係る「読み」の実相について、記録の収集、整理を行う。史的観点から変容の過程とその理由を明らかにする。

なお、2020-2021年度は、新型コロナウイルス感染症罹患対策のため、予定していた訪問調査(大学図書館所蔵資料調査)の多くが中止になり、予定していた新規資料を収集することができなかった。そのため、研究が遅滞したが、前年度までに収集した資料、及び対象・時期を限定することで、研究を進めることとなった。

### 4. 研究成果

(1) 研究系列A：大正末から昭和初期(～8年)における文学教育実践に関する研究

研究系列Aについては、平成30、令和元年度では、主に大正十年代の国語科・文学教育実践に関する先行研究の到達点整理を進めるとともに、同時期の小学校国語教育における文学教材の実践事例、特に「想像・空想」に係る児童の「読み」に関する実践事例について、東京高等師範学校、同附属小学校、及び各地(北海道、秋田、京都、大分、鹿児島)の師範学校、同附属小学校等の実践記録、教案、各地の教育雑誌等を対象とした調査研究を行い、「読み」の場面で児童主体の自由な「想像」が重視されていく多様な形態の実践事例を収集した。これらの実践事例からは、大正新教育の影響下のもと、文学教材の受容に際し、急速に児童主体の「想像」が重視されていく事例が数多く見られた。その一方、「想像」を「過度な空想」として批判し、排除する立場も強く示されるなど、児童の「読み」を巡り、対立的な構図が生じていたことが明らかとなった。

前者については、例えば「文芸の根本は情緒であり、情緒をして感ぜしむるものは想像の力である。読むことによつて豊かな想像がめぐらされ、文の生命を把握させて深い鑑賞にまで導く」(大旗祐吉「国語読本の文芸的材料について」、「国語教育」大正15年)といった言説に代表される文学教材観を前提にしている事例が多い。ただし、大旗が続けて「児童をして作者の想定をさせてその境地に立たせる事」(同)が重要であると指摘するように、教師による、児童の、登場人物への寄り添い、「同化」による「共感」を強いる方向性、つまり教師による児童の「読み」の統御が強くなされたことも明らかであり、その様態からは児童の自由な「読み」が十分に担保されていたとは言い難い。大正新教育の影響を受け、国語読方教育においては、児童の文学教材の「読み」は、児童の自由な「想像」によって形成されている、または形成されるべきだと考えられる土壌は育ちつつあったが、実際には、その「想像」は、登場人物との「同化」「共感」への促しが中心であり、自らの考えを踏まえた「批判的眼差し」は認められない。仮に、指導案に基づいた「自学自習」で得た「読み」が教師による統御を受けたものであっても、「分回学習」「学級学習」等の集団における「読み」の競合ともいえるべき状況に置かれれば、「批判的読み」が形成されていった可能性を想定できるが、教師主導の枠組みを持つ、ヘルバルト派教育学の五段教授法の簡略版である三段教授法が教育方法の主流にあってはそのような方向への展開されることはなかった。一方、児童の「想像」自体を「過度な空想」として排除する立場では、もちろん児童の自由な「読み」は許容されず、教師の示す一元的な「正しい読み」を提示することが

求められていたため、元来、児童の自由な「読み」が成立することはなかったのである。この場合、修身的価値観を背景にした主張であることが多く、児童の主体的学習態度自体に対する抑制的かつ批判的な立場を見ることができた。

これらの研究成果を踏まえ、令和2年度、3年度には、学校教育に関する多くの言説が変容した、昭和6年前後の小学校国語科における文学教育実践に関する調査を中心に行い、昭和6年の日華事変を契機として、国語教育の「読み」のあり方にも大きな影響をもたらしたことを明らかにした。日華事変を契機に、学校教育のあらゆる場面では「戦時下」が強く意識されるようになるとともに、校長訓話や修身教材に限らず、運動会、童話会といった学校行事の多くが戦時に彩られていく。このような状況下において、文学教材に対する児童の「読み」、そこでの「想像」は大きく変容していった。例えば、昭和6年から7年にかけて刊行された「満州補充読本」については、後に編者、石森延男が「満州補充読本」はけっして国威発揚を掲げたものではない、敵愾心をそそるものではないと断じてない。当時としては危険視されるほどの人間性を帯びた自由性の豊かな教科書であった」（石森延男『満州補充読本 復刻版内容見本』1979年）と述べ、大正新教育との関わりを彷彿とさせる「人間性」、「自由」への想いやそれが反映した「楽しい国語」に向けての教科書であったと回想を寄せている。しかしながら、そこに埋め込まれた被差別的な眼差しや、自らを優位に立たせる支配-被支配の構図には極めて無自覚であると言わざるを得ない。先に触れたように、児童の「想像」に基づく自由な「読み」は、対象への「同化」による、統御された「読み」に他ならなかったことを踏まえれば、教材に内在した、差別的な眼差しや支配観は容易に児童の心に転移するものと思われる。これは一例であるが、この事変を契機として、子どもの「読み」は、一層、ナショナリズムに圍繞された形での「想像」が強いられるという、捻じれた「読み」として展開された位置づけることができる。

## (2) 研究系列B：大正末から昭和初期（～8年）における国語教育理論に関する研究

研究系列Bでは、同時期における国語教育理論の先行研究の到達点整理を進めるとともに、東京高等師範学校附属小学校研究誌「教育研究」、及び各地（北海道、東京、奈良、鹿児島）の師範学校（附属小学校含む）研究誌、教育講演会を対象とした調査により、当時の教授理論形成過程を授業実践との関わりにおいて捉えた。童話教材については、大正2年時点で既にその「想像」性について次のような指摘がある。「童話と称するは之と異なり、きはめて自由の想像によつて構想されたもの」であるが、「空想を鼓舞し、虚偽を教へ、不純粹の教訓を含むとなし大に反対の見を持つるものもある」（加藤末吉『実験修身教授法』、大正2年）として、その「想像」性については批判的である。大正期が進み、学校教育において「新教育」が意識されるようになると、児童の自由な「読み」、「想像」を重視した「読み」が前景化し、一元的な「読み」と対立的な構造を取るようになるが、「読み」を理論的に考える立場においても、「読み」のあり方を巡り模索が続くことになる。

昭和期に入るとそれらの言説は、次第に一元的「読み」を尊重する立場に収斂していく。その契機となったのは垣内松三の『国語の力』である。ここに示された「形象理論」によって、読者の「読み」の主体性を排除する流れが形成され、そのことで国語教育実践に多様な「読み」の狭小化をもたらす結果となった。垣内の示した「形象理論」が国語教育理論に与えた影響は大きく、大正末から昭和初期にかけて出された様々な立場の言説は、垣内の主張を踏まえたものとなっていき、それと同時に子どもの自由な「読み」、主体的な「想像」を重視する授業実践も著しく縮小していったのである。そのような状況下で独自性を見せたのは芦田恵之助である。芦田は、「読み」のあり方を、「自己を読む」と定位し、物語世界の全面的な受容を前提とした自由な「読み」を提示した。しかし、この児童の自由な「想像」に基づいた多様な「読み」は、登場人物との「同化」「共感」を前提としており、結局のところ「批判的眼差し」を得ることはできなかった。昭和期ナショナリズムの興隆期に見られる、国語教材の持つ「抑圧的眼差し」を無批判に受容した「読み」のあり方の源流は、登場人物への「同化」「共感」を前提とした「読み」のあり方にあり、その点を「理論」的に捉えられなかった点で、大正新教育から展開された国語科読方教育の破綻は既に予期されるものであったといえる。

## (3) 研究系列C：大正末から昭和初期（～8年）における言語教育実践における文学教材等の取扱に関する研究

研究系列Cでは、就学前言語教育に係る先行研究の到達点を確認するとともに、就学前言語教育実践（素話や絵本、口演童話等）及び小学生の課外読物実践に係る「想像・空想」に係る「読み」の実相について、記録の収集、整理を行い、その実態を明らかにした。就学前の「読み」については、特に音声表現による文学受容の実態が明らかになった。大正期には、口演童話や児童雑誌が興隆し、「聞くこと・読むこと」をとおして童話を社会全体に普及させる役割を果たしたが、昭和期には、さらに広範囲な伝播力をもつラジオやレコードを媒体として、童話は大衆文化の一つとして存在するようになった。そのような社会状況の中にあつた昭和初期の童話が、幼稚園教育において、どのように認識されていたのか、その実態の一端を明らかにした。また、昭和6年以降、地域単位での幼稚園・小学校の教育連携が進み、幼稚園で開催される「お伽会」「童話会」においても、満州事変を題材にするなど、小学校教育と連続した形で、ナショナリズムに圍繞された「読み」の在り方が拡大していったことが明らかとなった。例えば、大阪市北区（現、大阪市西区鞠町近辺）の幼稚園、小学校、女学校、商業学校および青年団、退役軍人会等の活動

や告知を集成した月刊誌「靱報」の昭和6年4月号には、靱小学校で行われた「第六回赤穂義士記念お話し会」の学校長挨拶が掲げられているが、そこでは「常に自治に立脚し児童本位に本会を開会せし本校の態度を明らかにし時代の趨勢に鑑みて精神教育に重きを置き（略）学校と家庭との家族的接触が児童教育に必要な所以」との一節を見ることができる。幼稚園、小学校を始め、地域の教育機関が一体となって、大正新教育で示された「児童本位」の姿勢を残しつつも、実際にはそれと地続きの形で、時局や国家家族主義に立脚した言説がなされていたことを見ることができる。

#### (4) 総括と今後の展望

大正新教育の影響を受け、国語教育では文学教材において、子どもの自由な「想像」を尊重する「読み」が成立した。しかしながら、昭和期に入ると、この「読み」のあり方は次第に変容していく。子どもの自由な「読み」は、次第にナショナリズムに組み込まれていくのである。その過程では、子どもの主体的で多様な「読み」と作者重視の一元的な「読み」の対立の中、前者は、次第にナショナリズムの枠に「囲繞された主体的な読み」に変容していった。そしてその先には戦時下の硬直化した「読み」のあり様が展開するのである。

今後は、大正新教育に源流を持つ子どもの多様な「読み」、そこからもたらされる自由な「想像」のありようが時代状況を受けどのように変位していったのか、ひいては、昭和初期の国語科文学教材に対する子どもの「読み」について、ナショナリズムとの関わりにおいてどのような変容が起こったのか、就学前教育とその周辺の言語文化状況も含めて、多層的にその実態と構造を明らかにすることが必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 桑原（北川）公美子	4. 巻 第54号
2. 論文標題 大正期の幼稚園教育における童話の「話し方」論 - 雑誌『話方研究』の松美佐雄に着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北川（桑原）公美子	4. 巻 53
2. 論文標題 大正期の幼稚園教育における口演童話とのかかわり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本康治	4. 巻 第52号
2. 論文標題 大正期の新教育運動における国語教育「自学自習」の位相 奈良女子高等師範学校附属小学校の事例を踏まえて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海大学短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桑原（北川）公美子
2. 発表標題 昭和初期の幼稚園教育における童話に関する一考察
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北川(桑原)公美子
2. 発表標題 大正期の幼稚園教育における口演童話に関する一考察
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山本 康治	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 明治・大正期国語科の成立と修身科との関わり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	桑原 公美子(北川公美子)  (KUWAHARA KUMIKO)  (00299976)	東海大学・スチューデントアチーブメントセンター・教授    (32644)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------